

# 東北復興日記

132

今月開催された第三回国連防災世界会議の中で、子供たちが主体となったジュニア会議に福島から出展した電源車「おてんと号」の写真がグッド減災賞の優秀賞を受賞しました。

この車は、二十年前の阪神淡路大震災と、東日本大震災、津波被災地支援活動の私の経験から生み出されました。



いわきおてんとSUN  
企業組合事務局長  
島村守彦さん



## 福島の思い乗せた電源車

た。福島の思いを込めて、発電は再生可能エネルギーのみで実現させました。太陽光と風力による発電に加え、天ぷら廃油の精製装置を搭載し、それを燃料として十五キロ発電し、リチウム電池に蓄電まで行うようにしました。

原発事故後に起きた異常とも言える売電目的のソーラーブーム。福島に住む者として、それに違和感がありました。発電した電気をただ単に売るのではなく自分たちで使う。

子供たちに体験型の再生可能エネルギー講習会を商用電力に頼らず行う。そんな思いを抱いていました。講習会で子

供たちが製作したシステムを避難所などに設置し、停電時に消えない明かりや携帯電話の充電に役立てるのです。

車には、太陽光パネルの手作り機器、太陽熱で調理するソーラークッカー、小型の水力発電機、災害用トイレまで搭載しています。グッド減災賞では、それが万一の災害にも備えられるとのことで優秀賞となりました。

原発事故後、脱原発イベントが各地で開かれています。その中身は膨大な電力を湯水のように使って脱原発を訴えるものも少なくなく、政府が進める原発再稼働が行わ

れば、強制的に原発の電気を使わざるをえなくなりません。

そんな中、私が参加する「いわきおてんとSUN企業組合」では、所有する太陽光発電所(四十九基)の電力を、特定規模電気事業者(PPS)である「つなかみの大地」(パルシステム東京の子会社)へ、東北の低圧太陽光としては初めて売電することになりました。福島の、顔の見える安心な電力を届ける、そんな未来につながる一歩にすることを願っています。

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。